鷗外、高蔭、そして柏亭：鷗外文化圏探求

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須田, 喜代次 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7008

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

鷗外、高蔭、そして柏亭

――鷗外文化圏探求――

須田喜代次

Ⅰ　「をしふねの」から「しほふねの」への訂正

『森鷗外宛書簡集2〈あーい〉編』（文京区立森鷗外記念館、二〇一九年七月）に収められた井上通泰書簡に、一九〇九（明治四十二）年三月三十日付の次のような一通がある。

今度歌学書院ヨリ出ダスベキ小出翁家集ニ梔花各篇ノ序ヲ一マトメニシテ載セ候筈ニテ既ニ写シズミ活版所ヘマハス迄ニ相成居候　イツゾヤノ御話ニ誤写ノ処アルヤウニ仰セラレキトオボエ申候　モシ改ムベキ処アラバ至急小生迄御通知相成度候　三月卅日夜　内幸町　井上通泰

この井上書簡を得た鷗外は、早速同年四月一日に「梔花集の序の写誤を正すことを井上通泰に申し遣」（「鷗外日記」）っている。

『梔花集』とは、正確には前年一九〇八（明治四十一）年六月に西東書房より刊行された小出粲[1]の歌集『梔花拾遺』のことで、鷗外はその上巻巻頭に「岩見の國人源高湛」名で序文を寄せている。この序は現『鷗外全集』第三十八巻に「「梔花拾遺」序」として収録されているのだが、その本文は鷗外が井上に「申し遣」った訂正形ではなく、「誤写ノ処」がそのまま残った本文になっている。また同巻「後記」の記載にも誤りがあるので、以下そのことを報告したい。

まず煩瑣ではあるが、上記全集「後記」を引用する。

> 明治四十一年（一九〇八）六月二日、西東書房発行の小出粲著『梔花拾遺』上巻の巻初に別人による浄書影印が掲げられた。右単行本の本扉には表題のほか「小出粲先生遺稿」「梔園蔵版」とある。明治四十二年四月一日の日記に「梔花集の写誤を正すことを井上通泰に申し遣る。」とある。
>
> 前回全集の本文は右単行本と多少の異同がある。単行本には振仮名なく、仮名にはすべて濁点がない。日記の文から推して明治四十二年に再版が刊行されたものと思われるが未見である。よって前回全集の所収本文に拠った。（傍線、須田。以下同様）

はじめに確認しておかなければいけないのは、小出の歌集は、当該『梔花拾遺』だけでなく、最初の『くちなしの花』（文石堂、一八九四年三月）以降、刊行された四編九冊、その本文は全て一人の書家による書をそのまま影印にした形で世に出ているということである。その書家とは誰か。それは、小出を和歌の師とする岡山高蔭（たかかげ）に他ならない。『梔花拾遺』本文末尾には、「明治四十一年五月二十八日東京にて／門人岡山高蔭／謹識」との記載がある。すなわち彼こそが全集後記に言う「別人」の正体である。岡山に関しては、後に詳述するが、井上が「誤写」と言い、鷗外が「写誤」という言葉を使っているのは、鷗外の元原稿を岡山が誤って筆にしてしまったということなのである。「誤植」とは違う。

また、揚げ足取りとの誹りを免れないかも知れないが、『梔花拾遺』に再版本はない。本稿冒頭井上書簡に見える、いま刊行しようとしているのは、それとは別の一九〇九（明治四十二）年八月五日、歌学書院発行の中川恭次郎編『小出粲翁家集』のことなのだ。こちらの本文は、岡山書写によるものではなく、全て活字本文になっている。そしてその巻頭に、これまで刊行された四編の歌集の序、すなわち「梔花初篇序」、「梔花続編序」、「梔花後編序」に続いて、鷗外の「梔花拾遺序」が載せられたのだった。井上が「小出翁家集ニ梔花各篇ノ序ヲ一マトメニシテ載セ候」と言う所以である。そして本書掲載の鷗外「梔花拾遺序」本文を見ると、井上に「申し遣」った本文訂正が反映された形になっていることを確認することができる。

問題箇所は鷗外序文の冒頭近くにある（本稿末尾【資料1】参照）。現全集掲載本文（それは『梔花拾遺』本文であるわけだが）は、以下の通りである（『鷗外全集』第三十八巻、一九九頁本文四行目）。

…かれ呉竹の世々にうつりかはれるやまと歌の意言（こゝろことば）と風の音の遠き国々の情抒（なさけの）べへうたのむかし今のさまとをを
しふねの並べかむがふるに朝鳥のかよへるふしなむ多かりける…

そして、右傍線部「をしふねの」が、『小出粲翁家集』において、「しほふねの」に改められているのだ。「しほふねの」（「潮舟の」「汐舟の」）は、「並ぶ」「置く」に掛かる枕詞であるから、「並べ」という語が引き続いて出てくることからしても、ここはたしかに「をしふねの」ではおかしい。意味が通じない。直後の「朝鳥の」は「通ふ」に掛かる枕詞であるから、ここで鷗外は二つの枕詞を対にした修辞的な文章を作成していることになる。その片方が間違っていては、せっかくの工夫が台無しになってしまう。

当該箇所は、歌集『梔花拾遺』巻頭、一頁目最終行にあるので、鷗外には余計気になった箇所でもあったのだろう。刊

行後、いつの時点でか不明ではあるけれど、鷗外はそのことを親しい井上通泰[2]に話した。それを通泰は覚えていて、冒頭に見た書簡の文言に現れたに違いない。

他にも『梔花拾遺』序と『小出粲翁家集』収録「梔花拾遺序」には、例えば平仮名表記が漢字に変わっているといった類の細かな違いは見られるのだが、鷗外がこだわらなければいけない「誤写」と言えるような箇所は、この一箇所だけである。

したがって、現全集三十八巻に「「梔花拾遺」序」として収められている本文は、『小出粲翁家集』収録形に改める必要があると言えよう。その際「後記」の訂正も必要になってくるはずである。

Ⅱ　書家・岡山高蔭と鷗外

自ら小出粲の「門人」と記し、師である小出の歌集全て（題簽・見返し・序文・本文の文字全て）に自身の筆を揮うという形でその上梓に関わった岡山高蔭は著名な書家である。

奥山錦洞『日本書道史』（清教社、一九四一年十二月、以下『書道史』と略記）、岡山泰四[3]著、岡山重夫編『書家・歌人岡山高蔭の伝と作品』（芸術新聞社、二〇一八年七月、以下『伝と作品』と略記）に拠りながら、まずその生涯を簡単にお浚いしておきたい。

彼は、一八六六（慶応二）年五月二十五日、名古屋市生まれ。実家は質屋を家業としていた旧家の素封家。年少の頃から書道に熱心で、初めは恒川宕谷（一八二九―一九〇七）、次いで鷗外とも因縁浅からぬ巌谷小波[4]の父である、巌谷一六（一八三四―一九〇五）に師事した。はじめ「漢字を懸命に臨書して勉強していたのであったが」、ある日「平安朝の美事な仮名を見て」仮名の研究に打ち込んだのだという（『伝と作品』）。また和歌は前述したように小出粲を師とし、「旧派歌

人中清新の歌風を以て聞えてゐる」とされる（『書道史』）。小出没後は、井上通泰に接近した。歌集として『高蔭三百首』（話雲閣、一九二一年九月）、『高蔭千首』（話雲閣、一九二二年十二月）がある。一九四五（昭和二十）年七月二十九日、満七十九歳で死去。

その岡山高蔭は、個人的にも鷗外と交流のある人物であった。

鷗外の日記に、初めて岡山が登場するのは、一九〇八（明治四十一）年四月十九日、この日は山県有朋邸・椿山荘で常磐会が開催された日であった。

椿山荘に徃く。岡山高蔭と相見る。（「欄外」には、「午後四時椿山荘」とある。）

この日を初めとして岡山の名は、翌一九〇九年に掛けて、かなりの頻度で鷗外日記に登場する[5]（ただし一九一〇年以降の「鷗外日記」には、岡山の名は登場しない）。それは、同年五月十七日日記に、「午後常磐会に椿山荘に徃く。白石資鉄、岡山高蔭与る」とある記述に端的に表れているように、主として一九〇六年六月十日夜、日本橋浜町の料亭・常磐での会合をきっかけに、同年九月二十三日から始まった歌会・常磐会に関連した交際であったと思われる。この常磐会選者の一人が、小出粲に他ならない。「小出粲の紹介で常磐会に出席し、書記的な役割をしていたようである」とは岡山泰四の言だが（『伝と作品』）、「鷗外日記」中に見える「与る」という表現からしても、おそらく岡山泰四の推測は間違ってはいまい。因みに彼と並んでその名が上がっている「白石資鉄」もまた、小出門下を経てこの時期井上通泰系に属していた歌人である。

早い時期に常磐会関係の資料を精査した坂本秀次に、一九〇六（明治三十九）年六月から一九二二（大正十一）年二月の山県有朋の死まで、都合十六年間、全百八十五回開催された常磐会に出詠し、その歌が選者によって採択された出詠者

を丹念に調査した「「たづぞの」からみた常磐会」（『鷗外』26、一九八〇年一月）という労作がある。それに拠れば、最も出詠数が多いのは、山県有朋で二〇八首。これは常磐会の中心に山県がいたことを考えれば、当然と言えば当然とも言える結果かも知れないが、この山県に続いてもう一人いる「二百首以上の出詠者」が、岡山高蔭なのであった。彼は、二〇三首選ばれている。三番目に多い「外山且正」の一三〇首と比してもずいぶんと数が多く、さらには白石資鉄五十八首、森高湛四十四首と比べても抜群の数である。岡山の常磐会への熱心な関わり方が窺えよう。こうした常磐会という場を通じて、鷗外との交流も深められていったようだ。

例えば、やはり一九〇八年の五月十三日「鷗外日記」の〔欄外〕に「朝岡山来省」との記述が残っている。翌十四日の〔欄外〕にも「朝岡山来省」という全く同じ文面が見え、当日日記本文には、「朝岡山高蔭来話す」との記載がある。平日（十三日は水曜日、十四日は木曜日）の朝、わざわざ陸軍省に森林太郎陸軍省医務局長を訪ねねばいけなかった用事とはいったい何だったのだろう。次の日曜日、五月十七日に開催された常磐会に、前述したように岡山は書記役として参加したと思われるのだが、それはわざわざ陸軍省に出向いて報告、もしくは何らかの相談をしなければならないようなことなのだろうか。

なぜこんな取るに足らない、些細なことにわたくしがこだわるのかというと、翌一九〇九（明治四十二）年十一月十六日（火）の「鷗外日記」に次のような叙述があるからである。

朝岡山高蔭山県公の命を帯びて陸軍省に来ぬ。

この「命」が何を指すのか、もちろん分からない。時期的に考えて、この年二月二十一日に小田原の古稀庵で常磐会が開催された際委嘱された[6]、「古稀庵記」に関わることかとも推測されなくはないが、そうだとすると二週間後の同年十一

月三十日日記にある「岡山高蔭来て絹と筆とを置きて行く。古稀菴記を書かん料なり」という記述と重なってしまうように思う。断言はできないが、「命を帯び」るという表現は、そうした個人的なものというよりもう少し重い内容を想起させないだろうか。この「古稀庵記」に関しては、鷗外は苦心の末それを十二月十一日に「浄書」し終える（「古稀庵を浄書す。」）のだが、その後鷗外は、同十三日に「午前岡山高蔭に山県公の存すやを問はせしに、猶古稀庵におはすと答ふ」という行動を取っている。つまり鷗外は知らない山県の動向を、岡山が把握しているということである。三日後の十六日に「椿山荘にゆくに、猶小田原におはすと云ふ」ということで無駄足を踏んだ鷗外は、十二月二十二日になってやっと「山県公有朋小田原より帰らせ給ふと聞き、古稀庵記を椿山荘へ持ちゆく」ことができた。憶測に憶測を重ねるようなことは慎まなければならないが、以上のような経緯を見てくると、鷗外の元に山県帰京の一報を入れたのは、岡山である可能性が高いのではないか。

こうして山県公に接する機会も多く、非常にかわいがられて、よく呼び出され、いわば四六時中、山県邸に出入りしていた。（略）また、山県公のメッセンジャーみたいなこともしていたことが、鷗外の日記（別掲）によって知ることができる。いわば私設秘書的な役目もしていたのであろうか。

と岡山泰四は述べるが（『伝と作品』）、たしかに鷗外と山県の間をつなぐ一つのパイプ役を岡山が果たしていた可能性は大きい。それだけの信頼を、岡山は少なくとも山県から得ていたということになろう。岡山家には、高蔭宛の山県書簡が「非常に太い二軸の巻子本に仕立てて」「いつも床の間に飾ってあった」のだという。

そのなかには、常磐会のことや公のもとに出入していた人々の動静とか、或は政治史の裏面を物語るような資料とな

るものもあったかもしれないが、いつでも読める状態にあったのに、つい私はひもといて読んだことがなかったのは、今になって残念に思えてならない。これも戦災で焼けてしまった。

これまた岡山泰四の言である。

Ⅲ　「森鷗外氏引札を書く」

右に述べてきたような鷗外と岡山高蔭に、若き画家石井柏亭が加わって成された小さな仕事が残されている。いわば文学者と書家と画家とのコラボである。

それは『読売新聞』一九一〇（明治四十三）年十二月二十三日三面に掲載された「森鷗外氏引札を書く／石井柏亭氏の画――蔵多家の所望」と題された記事に見えるもので、この記事自体は、現『鷗外全集』第三十八巻に「蔵多家引札」として収録されてはいる。しかしながら以下に見るように、「蔵多家引札」は鷗外文章の題名ではなく、全集編者が内容から判断して付けた題名であること、そして現行全集本文では、この試みに岡山高蔭の参与が全く窺えないこと、からこれまた以下に些細な報告をさせていただく。

本稿末尾にその新聞記事のコピー（【資料2】）を掲げたが、これではその詳細を判読することはできないと思われるので、以下全集を参照すれば済むことなのだが、新聞記事に即して全文を起こしてみる（原文は記事の部分のみ総ルビ、鷗外文章にはルビ無しだが、全て省略する）。

●森鷗外氏引札を書く

石井柏亭氏の画――蔵多家の所望

日本橋檜物町の割烹店蔵多家主人の懇望により森鷗外氏は珍らしくも同家の引札に筆を執り石井柏亭氏の画と、もに左の如きものを作り上げたり、パルナス、アンビユランなどに見たる鷗外氏が諷刺の筆とはまたガラリと趣き変りて蜀山人あたりに似通へる節を見ること、実に氏の多趣味に驚くべし。因に蔵多家は祖先が豆腐屋より仕上げたるもの、由にて引札中「空也豆腐云々」の文字あり、尚同家は先頃火災に罹りて新築したるもの（桃色紙に刷る）

とうふ女也

＊柏亭の絵

名は空也豆腐の寂ひを
伝ふれと今めかしき文化の
果実をも棄てすさりとて
洋風の真似事に日本料理の特色を
失はんは暖簾の恥なるへし東に常磐
あり北に八百膳ありてこれも食饌に縁
なる鼎の足の勢をなさんとするこの
蔵多家の主人の志を誰かは壮なりと
せさらん爰に火後の経営新に成れる日
主人に代りて一文を艸し四方同嗜の
客に檄すと云爾

鷗外漁史高湛　印
岡山高蔭書　印

この年の六月、『中央公論』に発表された「ル・パルナス・アンビユラン」という鷗外作品が対照されているが、確かに珍しい鷗外「作品」である。上掲囲みを施した箇所が、当該「引札」に当たる部分なのだが、この文字が岡山高蔭の書なのであった。現全集本文は「鷗外漁史高湛　印」までの紹介であり、傍線部は起こされていないので、この仕事に関する岡山の関わりは全く見えない。また、この「引札」の存在は、前述『伝と作品』にも紹介されていない。

「鷗外日記」に拠れば、一九一〇（明治四十三）年十一月二十一日に、「小糸悦之助蔵多家の事を嘱す」、そして同年十二月四日

に「小糸悦之助に蔵多家の刷物を書き遣す」という記述があり、これが本件に関わることであると思われる。小糸悦之助が蔵多家関係者（先の『読売新聞』記事は、「日本橋檜物町の割烹店蔵多家主人の懇望」とする）であることは当然推測できるが、わたくしは現在のところその素性を確認することができていない。「鷗外日記」に小糸が登場するのも右両日だけ[7]であり、両者にそれほど深い関係があったとは思われない。そもそも何故鷗外に白羽の矢が立ったのか、これも不明である。ただ読売記事がこうした文学者鷗外の言動に、「蜀山人あたりに似通へる節」を見ている点は興味深い。鷗外という文学者の中に、近世文学者の血脈を垣間見るという観点からして、である。

「蔵多家」に関しては、一九〇七（明治四十）年四月晴光館書店発行、春曙居士編『東京番付案内』に収められた「料理屋見立」に、「前頭　日、檜物　倉田屋[8]」として掲げられている。因みに「東に常磐あり北に八百膳ありてこれも食饌に縁なる鼎の足の勢をなさん」との文言が「引札」中にあるが、右「料理屋見立」では、「濱一　常盤屋（ママ）」は「行司」に、「浅草、吉野　八百善」は「大関」に見立てられている。さらに森利助『東京案内』森集画堂、一九〇九年六月）収録「食通案内」にも、日本橋檜物町「倉田屋」という名は、浅草区吉野町「八百善」と共に掲載されており、当時著名な料亭の一つであったことを確認することができる。

そしてこの鷗外文、高蔭筆の「引札」に、「とうふ女」の画を添えたのが、石井柏亭なのであった。描かれている「とうふ女」の右に「柏」を〇で囲んだ柏亭のサインが見える。一八六二（文久二）年生まれの鷗外、一八六六（慶応二）年生まれの高蔭に、一八八二（明治十五）年生まれと一世代若い柏亭が加わったわけである。

「本郷区駒込千駄木町二十一番地」にあった鷗外邸と道路一つ隔てた「本郷区駒込千駄木林町」、その八番地、そして同百八十三番地[9]に住んでいた石井柏亭と鷗外との関係が密になるのは、二年前の一九〇八（明治四十一）に遡る。その年、六月三日の「鷗外日記」に以下のような記述が見られる。

Festspiele の画を石井柏亭に、其印刷を高橋金四郎に托す。

これが柏亭の「鷗外日記」初登場である。「Festspiele」とあるが、これは近々来日するロベルト・コッホ（同年六月十二日「午前十一時半 Robert Koch 及夫人を新橋に迎ふ。」「鷗外日記」）歓迎のために、同月十六日歌舞伎座で催されることになる歌舞伎観劇会用に用意された鑑賞の手引きとも言うべき小冊子のことで、その表紙絵を柏亭に依頼したのだった。鷗外自身はこの「独逸文ノ筋書」[10]を、繁忙の中、六月二日「一晩徹夜シテ書イ」（「Festspiele ニ就テ」『陸軍軍医会雑誌』第百七十一号、一九〇八年六月。「夜 Festspiele を草す。」「鷗外日記」）ている。その足で翌朝柏亭に依頼したのである。翌六月四日には「柏亭の画を印刷会社に送る」とあり、いかに急ピッチで成された仕事であるかが分かる。柏亭はその時のことを次のように回想している。

これはコッホ歓迎の演劇が鷗外等の肝煎によって催されるについて、そのプログラムの表紙を私が頼まれて描いたのであった。この日記で見ると三日その出勤がけに、サーベルの音をさせた鷗外が私の玄関を訪れて親らこれを頼まれたのであるが、その四日に印刷へ廻したとあるから、実に大急ぎの仕事であった。その時の出しものが道成寺、曽我、千本桜というようなものであったので、私はその表紙へ道成寺を描いた。独逸文の文字は私のが面白くないと思ったらしく、あとで出来たのを見ると鷗外の手でそれをイタリック風に改めてあり、確かにその方がしゃれていた。（『柏亭自伝』中央公論美術出版、一九七一年七月）

柏亭は「千駄ヶ谷時代の新詩社の月次会には私も同席し、馬場、上田の諸先輩や、高村、平野、茅野、北原、吉井、長田、太田、栗山等の諸同人と会した」とするように新詩社との関係が早くからあり、一九〇二（明治三十五）年からは

『明星』にも挿絵を寄せていた。そうした関係もあって、柏亭登用となったのであろう。以後柏亭は鷗外と親しく交わりを結ぶようになり、「夕に短詩会を催す。森田米松、石井柏亭（亭）臨時に列席す」（一九〇九年十一月六日、「鷗外日記」）とあるように、鷗外邸で開催されていた観潮楼歌会にも顔を出したりしている。

その柏亭は、一九一〇年十一月二十八日に鷗外邸を訪れている（「夜石井満吉来話す。」「鷗外日記」）。折から彼は十二月十日、横浜からの渡欧を控えていた（帰国は一九一二年十月）。したがってこの日の鷗外邸訪問が、その渡欧の挨拶[11]であるのか、それとも十一月二十一日に鷗外が依頼を受けた前掲「蔵多家」「引札」に関連するものであるのか、判断しにくい。ともあれ前述した「Festspiele の画」の時のことを思えば、「とうふ女」の画など朝飯前といったところであろう。しかしながらこの仕事に関することは、その「Festspiele の画」とは違い、先に見た岡山に関する『伝と作品』同様、柏亭自伝の類には一切登場しない。

つまりそれは、この些細なコラボが、岡山高蔭にとっても、石井柏亭にとっても、忘れ去られてしまうような、本務の余暇のほんの片手間の仕事であったということであろう。それはもちろん鷗外森林太郎にとっても同様であったには違いない。違いはないのだが、高蔭と柏亭を直接結びつける糸は見いだせないので、このコラボは、その中核にいた鷗外を抜きにしては成り立たないことも確かである。

三者それぞれにとって、取るに足らない些細な出来事に過ぎないのだけれども、そこには当代文化人同士の交流という、豊かな鷗外文化圏とも言うべきものの一端が見いだせるのではないだろうか。

最後にこの「引札」と呼応する、半年ほど後のやはり『読売新聞』一九一一（明治四十四）年五月二十三日五面掲載、「引札文学」なる記事の導入部を紹介しておきたい。

森鷗外氏が料理店蔵多家の引札を書き、石井柏亭氏がそれに絵を描いたのは、柏亭氏洋行前の事であるが、今回又岡野知十氏は茶寮天然自笑軒の為めに左の洒落文を書き保壽堂好みの刷物にした相だ。(12)

注

（1）小出粲（こいで・つばら、一八三三―一九〇八）は、宮内省文学御用掛、御歌所主事を務めた歌人。一八九四（明治二十七）年刊行の『くちなしの花』雪・月・花三巻を皮切りに、没後刊行の『梔花拾遺』上・下二巻まで四編九冊の歌集を刊行した。一九〇八（明治四十一）年四月十五日逝去。その死の報を受けた鷗外は、「朝小出粲の十五日にみまかりしを聞きて往きて弔ふ。病は肺炎にて入澤達吉治療せりきと、柩のほとりにありし森田義郎語る。／おも白いおやぢと春のつれて行く」とその日記（同年四月十七日）に書き記し、同月二十一日「小出粲の葬を送りて谷中斎場に」赴いている。なお、森田義郎（一八七八―一九四〇）は、子規門下の歌人で、この時期は『心の花』に拠っていた。

（2）鷗外と井上通泰との交流に関しては、常磐会を中心にして、拙稿「「少々我儘ナル」鷗外と「癇癪持」通泰との交情――森鷗外宛井上通泰書簡を巡って――」（『森鷗外宛書簡集2〈あ―い〉編』（文京区立森鷗外記念館、二〇一九年七月））において、若干の考察を試みた。

（3）岡山泰四（一九〇八―一九九五）は、岡山高蔭の四男。また編者である岡山重夫（一九四三―）は、岡山泰四の三男。

（4）小波の名を一躍高からしめた「少年文学叢書」第一編、『こがね丸』（博文館、一八九一年一月）に、鷗外は「少年文学序」（後に『月草』収録時に改題され「少年文学に題す」として『鷗外全集』第二十二巻に収録）と題した序文を寄せている。この序文が、小波からの度重なる懇請に応えたものであることが、前記『森鷗外宛書簡集2〈あ―い〉編』収録〔一三五〕～〔一三七〕鷗外宛小波書簡から窺える。

（5）青田寿美「『鷗外全集』第三十五巻　日記索引（人名篇）」（『森鷗外研究』9、和泉書院、二〇〇二年九月）。

（6）「小田原なる古稀庵に常磐会を催さる。列席して午餐、晩餐の饗応を受く。古稀庵の記を作ることを嘱せらる。」（「鷗外日記」一九〇九年二月二十一日）

（7）注（5）に同じ。

（8）「くらた」は「蔵多」・「倉田」両方の表記がある。

（9）「私の一家は四十二年の夏、林町八番地の家から同じ町内の百八十三番地のやや広い家へ移ったが、そのはっきりした月日が判らない。」（『柏亭自伝』）。ただし一九〇九年七月二日付、鷗外宛柏亭書簡に「先夜は参堂御邪魔申上候　転居御報申上候」と転居通知がなされており、同葉書にある彼の住所「本郷区駒込千駄木林町百八十三番地」は住所印が使用されている（前掲『森鷗外宛書簡集2〈あ―い〉編』）。

なお、柏亭石井満吉を編集兼発行人とする『方寸』奥付記載の彼の住所は、一九〇九（明治四十二）年五月発行の第三巻第四号までは「本郷区駒込千駄木林町八番地」であるが、同年七月発行の第三巻第五号から「本郷区駒込千駄木林町百八十三番地」となる。

（10）原文「Festspiele aufgeführt zu Ehren Robert Kochs im Theater Kabuki am 16ten Juni 1908.」は、『細菌学雑誌』（一九〇八年八月、臨時増刊「ロオベルト・コッホ氏歓迎記念号」）に掲載。現『鷗外全集』第二十六巻、収録。

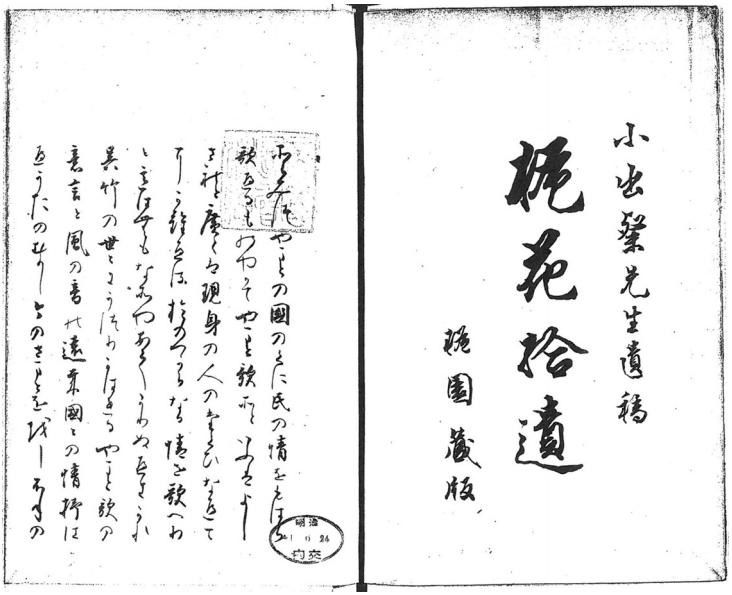
（11）一九一〇（明治四十三）年十二月七日付鷗外宛葉書（本文印刷）において、柏亭は次のように自身の渡欧を告げている。

拝啓小生儀来る十日午前八時二十分新橋発仏国汽船「ポリネシアン」にて欧州漫遊の途に就くこと、相成候　出発前一々拝趨の暇無之乍略儀以端書右御通知申上候　旅中或は音信怠り候やも図り難く小生折々の消息は何卒「東京朝日」「方寸」「美術新報」等にて御承知被下度願上候　尚小生留守宅は従前の通りに御座候　匆々

十二月七日

（12）読売記事は以下に「蛙鳴く田端の里、…」という「洒落文」を掲げている。しかるにこの一文は「天然自笑軒引札」と題されて、現『鷗外全集』第三十八巻に、鷗外作成のものとして収録されている（「執筆年次、出所等不明。前回全集所収本文に拠り、仮に雑纂の末に附した。」同巻「後記」）。しかしながら当該記事に明らかなように、これは鷗外作成のものではなく、俳人・岡野知十（一八六〇―一九三二）の手になるものである。したがってこの一文は、『鷗外全集』からは省かれねばならない。

【資料1】小出粲『梔花拾遺』冒頭部



＊最終行に「をしふねの」とある。

鷗外、高蔭、そして柏亭

【資料2】『読売新聞』一九一〇（明治四十三）年十二月二十三日三面



●森鷗外氏引札を書く

石井柏亭氏の畫――藏多家の所望

日本橋檜物町の割烹店藏多主人の懇望により森鷗外氏は珍らしく同家の引札に筆を執り石井柏亭氏の畫とともに左の如きものを作り上げたりパルナス、アンピュランなどに見る

（以下、判読困難）

＊本稿執筆に当たって、岡山高蔭関係に関して、本学文学部コミュニケーション文化学科・松村茂樹教授より様々なご教示を賜りました。記して謝意を表します。